

》 消 夏 随 筆 《

## 甘 さ の 構 図

大 友 一 夫\*

初夏を迎えると、ビール会社のコマーシャルが生き生きしてくる。火照った体は苦味を要求する。

山といで湯の一人旅が趣味だった若いころ、北アルプスの高天が原温泉を目指した。どのバス道路から歩いても12時間はかかる。ようやくたどり着いて一風呂浴び、ビールを注文すると、明日ヘリコプターで届くとのこと。やむなくウイスキーを口にしましたが、その辛味には辟易した。

登山すると体が喜ぶ味が良く分かる。甘い菓子類と梅干しのお握り、レモンは必携品であった。レモンなど丸かじりしても、少しも酸っぱいとは思わない。最後の仕上げが湯上がりのビールで、その醍醐味はこたえられないものであった。

今なら携行品に苦いだけのチューインガムがあったら加えたいところだが、改めて苦味を探してみると意外に少ないことに気づく。

蔞の薑、ウルカ、ホヤ、緑茶、ユズ、菊花、苦瓜（最近缶ジュースを飲んだが、甘味が加えられていた）などが辛うじて思い浮かぶ程度である。食生活における五味のバランスは大丈夫であろうか？

世の中甘いもので満ち満ちている。堂々と苦言を呈する人や、苦み走った男も最近見なくなった。

◇ ◇ ◇

甘いと言えば、昨今の為政者には、腹膨る思いを抱く人も多いのではなかろうか？それは彼らの危機管理などに関する甘さのなせる業である。無辜の民を守る將軍の気概に欠けるということは、肝気が虚している証拠である。

肝気は、責任感や自立心、決断力や勇猛心を育む。《靈枢論勇篇》でも明らかなように、勇者は肝胆の気が充実し、怯者にはそれが欠けている。

ところで、肝気が虚したときには、脾気を充実せよと、《金匱要略》の冒頭にある。それが「上工未病を治す」ということだと「師」が答えている。相生相剋の関係でいくと、脾気が実すると、腎水が衰える。腎水が衰えると心火が盛んになる。そのために肺気が傷られ、結果として肝気が盛んになると言うのである。ひどく

\* おおとも・かずお。医師。大友医院院長。埼玉県秩父市。

回りくどい論法で、肝気の充実のためには、体がガタガタになっても構わないことになる。

《難経七十七難》の「上工治未病」の言い回しを真似たのであろうが、《難経》では、肝虚ではなく、肝実（邪気）の病態を論じており、この場合は脾気を実するのが順当である。ちなみに《素問刺熱篇》に於ける「治未病」とは、五臓が病むに先立って、それぞれに対応する顔の部位に赤みがさすので、それを察知して、未然に対処すべきであるとしているのである。

《金匱要略》の「師」は、《傷寒論》の「師」と同様、もとより張仲景ではなく、後世の注釈家であろうが、解釈の甘さから察するに、大変怪しい「師」であると思われる。

相侮の関係からいくと、肝気が虚すと、脾気が旺盛になるのが理（ことわり）で、貪食になる可能性がある。気概のなさや甘みの飽食とは

簡単に結び付くのである。

肝気を補い脾気を瀉するには、酸味で直接効果をねらうか、「母は子を瀉し、子は母を補う」原則から、苦味で対処するのが良い。

◇ ◇ ◇

昔、小倉重成先生が、患者にいきなり「果物顔だ」「肉顔だ」と突っ込んでいたのを思い出す。その「果物顔」が確かに多くなった。

私は変形性膝関節症、慢性関節リウマチ、アレルギー性疾患、冷え症、膀胱炎などの患者には、甘いものを控えるように指示している。

甘みは確かに和（やわ）す働きがあり、平和な世の中を象徴している。しかし、五味の調和からみると、あまりに甘みに片寄り過ぎており、現代の様々な病巣に、この甘さが関わっているように思えてならないのである。